

玉手山1号墳範囲確認調査概報

1988年3月

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市内には多数の遺跡が存在しています。その中でも古墳の数は約2000基ともいわれ、単一市町村としては全国最多のものです。東山一帯に広がる古墳時代後期の平尾山古墳群がその大多数を占めるのですが、松岳山古墳群、玉手山古墳群といった、質、量共に府下有数、最大の前期の古墳群の存在も見落すことはできません。これら前期の古墳群と中期になり隆盛した古市古墳群との関連を考えることは、古墳時代の政治、経済、文化の流れを知る上で、忘れてはならない作業の一つと言えます。

玉手山古墳群は高度経済成長を背景とする宅地開発の波を受け、その半数を既に失い、残っているものの中にも半壊状態にあるものが多くあります。そういう状況の下で1号墳は比較的良好な姿を留めています。周辺住民の方々には古くから古墳と認識され、その存在の重要性は深く理解されています。この貴重な歴史的遺産をその姿を失うことなく、子々孫々まで伝えていくことは、今を生きる我々に与えられた責務であると考えます。

今回の調査は単なる保存、保護だけにとどまらず、もう一步進め、整備、公園化を前提としその一環として実施しました。将来的に市民の歴史教育の場、憩いの場として歴史的遺産を役立せることを目指しています。

今後とも市民の皆さんの御理解、御協力を賜わりますよう、お願いする次第です。

1988年3月

柏原市教育委員会

例　　言

- 本書は、柏原市教育委員会が、1987年度国庫補助事業・重要遺跡範囲確認調査として計画し、社会教育課が実施した、柏原市片山町14-19, -20所在の玉手山1号墳の範囲確認調査概要報告書である。
- 調査は、柏原市教育委員会社会教育課石田成年が担当した。本書の編集は石田が、また執筆は石田、近藤康司（第2章）がそれぞれ担当した。
- 本書で使用した方位は注記のない限り磁北で、標高はT. Pである。
- 調査、整理にあたり次記の諸氏の参加、協力があった。

石田 博	松井隆彦	竹下 賢	奥川滋敏	北野 重	安村俊史
桑野一幸	森島康雄	谷口京子	戸中優香	松下 修	秋田大介
伊藤芳匡	稲岡利彦	近藤康司	西 一晃	井上岩次郎	奥野 清
奥野義夫	谷口鉄治	分才春信	道旗甚蔵	森口喜信	(順不同・敬称略)

- 調査にあたり、周辺住民の方々をはじめ、次記の方々の絶大なる協力を賜った。記して感謝の意を表します。

柏原市市民部生活環境課

柏原市企画財務部財務課管財係

玉手第5町会

はしがき

例　　言

目　　次

第1章	調査に至る経過	1
第2章	玉手山1号墳をとりまく環境	1
第3章	遺構	7
第4章	遺物	12
第5章	まとめ	20

図　　版

第1章 調査に至る経過

玉手山1号墳は玉手山古墳群の最北端に位置する北向きの前方後円墳である。玉手山丘陵上には前期の前方後円墳が10数基、中期以降の円墳が数基存在していた。しかし1960年代以降、高度経済成長を背景とする宅地開発の波は例外となく玉手山丘陵にもおしよせてきた。それにより緑が映えていた丘陵の景観は大きく一変した。また古墳の中にも破壊され、その姿を永久に失ったものもある。無秩序な開発はここにおいても自然環境、文化的遺産を代償として奪い去ったのである。

そういった状況の下で、玉手山1号墳は玉手山古墳群の中では最良の状態でその姿を留めてきた。1971年には近鉄ビル株式会社による開発が計画されたが、開発側及び府教委等関係機関の努力により、保存区域として設定され、墳丘部の殆んどが市有地となった。しかし現状は高さ3m近い篠竹が生い茂る荒蕪地となっている。地元の協力を得て、毎年草刈りは実施しているものの、費用その他の面で制約もあり、とても追いつくものではない。現状のままでは防犯、防火の面において危惧されるとの声が地元から寄せられており、市としても放置しておくこともできない。そこで、財政面や後円部にある私有地の処遇等、問題は山積みされているが、構想としてあった古墳公園化に向けての保存、整備が急がれることとなったのである。

今回の調査は1987年度国庫補助事業・重要遺跡範囲確認調査（総額1,500,000円、国補助率50%、府補助率25%、市負担率25%）として計画し、古墳の範囲、遺構の残存状況を確認し、その基礎資料作成と充実を目的とするものである。調査として、その目的上、必要最小限のトレンチによる発掘と、墳丘および周辺地の測量を行うものとした。なお、調査に先立ち、墳丘の現状確認、作業の円滑な実施（測量の際、見通しをよくする等）をはかる為、墳丘全域において下草刈りを実施した。前述のように下草とはいえ3mもの篠竹が群生していたことから、予想以上、作業に手間どり、調査期間の半分を下草刈りに費すこととなり、発掘調査についてはその規模を縮小せざるを得なかった。

調査期間は1986年7月1日から8月28日までである。

第2章 玉手山1号墳をとりまく環境

玉手山1号墳が存在する玉手山丘陵は、大和川・石川合流点の南、石川と原川に挟まれた場所に位置する。この丘陵は独立丘陵であるが生駒山地の一部に含まれるものである。

また、地質的には砂、礫、粘土が互層をなす大阪層部と二上山の火山噴出物が堆積した二上層群とからなる。

標高は約80～100mを測り、頂上部は平坦となっており、そこに玉手山古墳群の大半が造営されている。1号墳は古墳群中最も北に位置し、前方部北側はすぐ斜面になっている。その他古墳、横穴墓、寺院等は丘陵斜面に造営されている。

玉手山丘陵では勝松山付近で握櫛、ナイフ形の旧石器が発見されており、玉手山丘陵の歴史はこの時期迄遡る。また、縄文時代では石鏃が発見されている。

弥生時代では、玉手山6号墳前方部下層で後期の住居跡が検出され銅鏃も出土している。さらに、丘陵南端の五十村・貝の鰐遺跡等にも後期の土器の出土をみる。この事実より、高尾山、平野山程高くはないが高地性集落の存在が考えられる。

古墳時代になると前期に10基の前方後円墳が造営される。これが玉手山古墳群である。過去1、4、5、6、9、10号墳の発掘調査が行われたが正式報告がなされていないものが多く、詳細は報告書の刊行を待ちたい。

墳丘は7号墳の150mを最長とし、10号墳の約45mまでばらつきがある。内部主体は後円部では竪穴式石室が多く（4、5、6、9、10号墳）粘土櫛のもの（3、4、5号墳）もある。また、前方部にも粘土櫛をもつもの（5、10号墳）もある。さらに、現在、安福寺境内におかれている瀬岐鷲の山石製の直弧文を有する割竹形石棺蓋は3号墳出土と伝えられる。副葬品では、武器や装身具が多く6、10号墳では銅鏡が出土し、7号墳では滑石製の盒子が採集されている。また、4号墳東側では埴輪棺と箱式石棺が検出されている。玉手山古墳群以外にも前期には丘陵南端に駒ヶ谷宮山古墳が造営される。また、かつて12号墳とされていた地点は埴輪をめぐらし、葺石を葺いた特殊な祭祀遺構であることが判明している。

以後、中期には丘陵西側に竪穴式石室を内部主体とする円墳の西山古墳が造営され、また片山庵寺付近から三角板紙留短甲形埴輪も出土している。後期では丘陵東斜面に玉手山東横穴群、西斜面に安福寺横穴群が營まれる。安福寺横穴群には騎馬像を線刻した横穴が1基存在する。

以上の様に玉手山丘陵は旧石器時代まで歴史が遡り、弥生時代には高地性集落が営まれ古墳時代には墓域として利用されるのである。
参照 『柏原市史』第二巻 1973

『大阪府の文化財』 1962

他、玉手山に関する発掘調査報告書等



図-1 調査地位置図

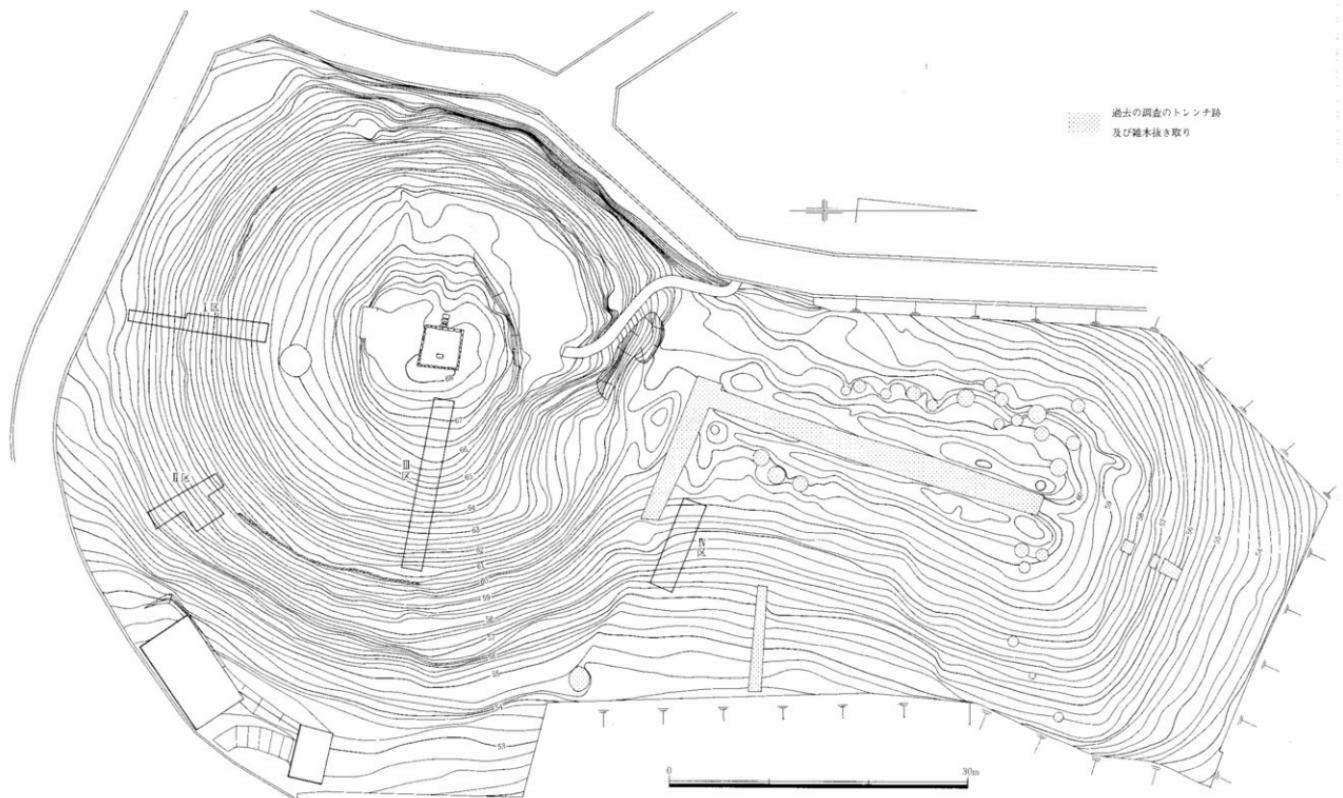


図-2 調査地地形図

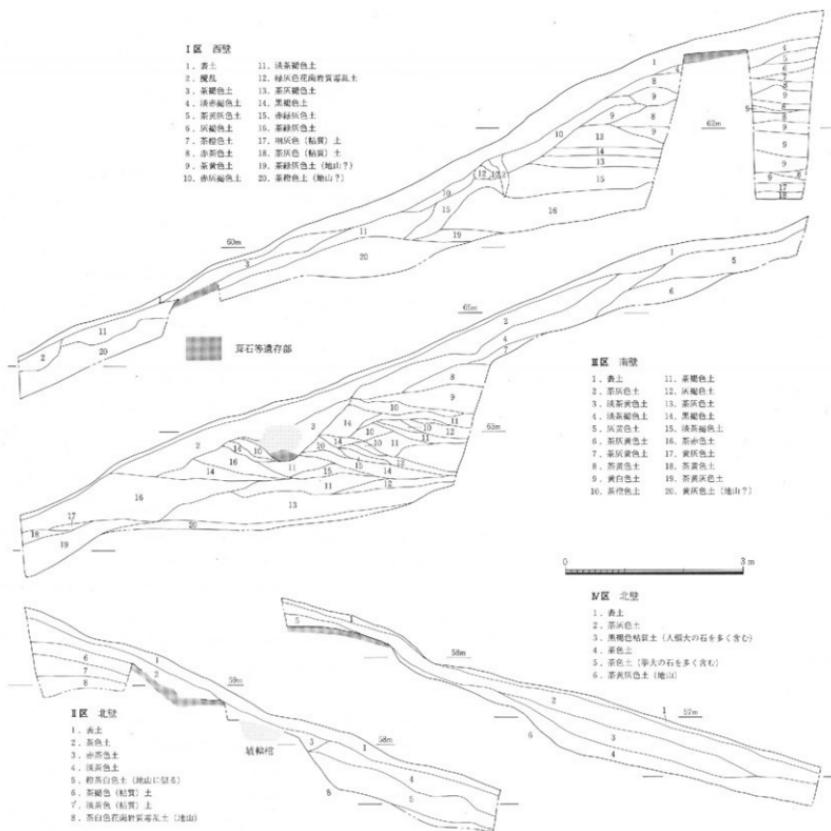


図-3 各調査区土層図

第3章 遺構

玉手山1号墳は主軸を北北東にとる北向きの前方後円墳である。標高は後円部の最高所で、68.425mを測る。前述のように周囲は住宅化し、特に前方部東側、北側においては墳丘に接して住宅が建てられている。その他の周囲は市道が接している。墳丘には全面的に篠竹が追い茂る。前方部東側から北側にかけては竹林となっている。後円部は南側を除いて雑木が繁る。

測量図をみると、前方部東側から北側にかけて、また後円部南西側からくびれ部東側にかけては基本的に原況を留めているものと思われる。前方部東側、くびれ部付近にかけては、東方向に地辻りでもあったかのような状況を示す。後円部頂には大坂夏の陣で戦死した奥田三郎右衛門の墓碑が建つ。この墓碑の周囲、標高64.5mから66mにかけては平坦面となっている。西北側については小松家の墓地、南側については果樹園による地形の改変である。後円部北側、前方部へのとりつき部についても大きく崩れている。前方部、後円部ともその西側については市道により大きく削平されている可能性が強い。

前方部からくびれ部東側にかけて、総延長50m、幅2.5m、深さ2mのトレンチが残る。大阪府教育委員会が1971年4月に範囲確認を実施しているが、その際には裾部にトレンチを設定したのみで、長大なトレンチについてはそれ以前の調査で設定されたものとのことである。¹⁾ そのL字形のトレンチは埋戻されることなく放置されており、よって掘り上げられた土は依然、前方部上部に残されたままである。おびただしい雑木の抜き取りと合わせて、前方部上部については、復元に際して参考となるようなコンターラインは描かれていないようである。

以上のような状況から墳丘遺構が比較的良好に遺存していると思われる箇所にトレンチを設定し、調査を実施した。後円部南裾部（I区）同東南裾部（II区）同東側（III区）くびれ部東側（IV区）の4ヶ所である。当初、前方部にも設定する予定であったが、下草刈りが予想以上に手間取り、予算面で余裕がなくなった為、次の機会にゆすることとした。

註1、「玉手山第1号古墳範囲確認調査」「節・香・仙」第1号 1971 大阪府教育委員会
府教委実施以前の調査については未報告のようである。

・ I区

後円部南側に設定した長さ14m、幅1.2~2mの調査区である。標高は58~64.5mである。

表土除去後、葺石を検出した。標高62.7~64m、58.9~59.8mの範囲に残る。墳丘第一段斜面の葺石は比較的良好な遺存状況を示しているようである。このすぐ上部に第一段テラスが続くものと思われるが、それに至る変化点はすでに削平を受けているのか確認できなかった。下部についても後述するII区でみられた墳丘基底石、テラスに対応する高さにおいて、それと確認できるものは残存していないかった。

この調査区で確認した墳丘の状況は、標高60~60.5mで地山（茶緑灰色土、茶橙色土）が緩やかな傾斜となり、その上に15~50cmの厚さで水平に土を盛っていく。調査区北端では赤茶色土、茶黄色土を互層に積んでいく状況が認められた。

・II区

調査II区は墳丘主軸に対して東南45°の方向に設定した8×2m（後に一部3×2.5m拡張）の調査区である。標高は57~60.5m。この調査区では墳丘基底石と思われる石列と基底部テラス、そしてテラス外側に主として楕円形埴輪で構成される埴輪棺を検出した。

墳丘基底石は直線に並ぶ。20~50cm大の石を使用する。その上部、葺石は10~15cm大の石を使用する。図示した部分より上部では、葺石は遺存していなかった。南端において、葺石間にくい込んで中世の土師小皿が出土した。のことから、その時期において地形の改変があったか、又は葺石がある程度まで露呈していたものと思われる。

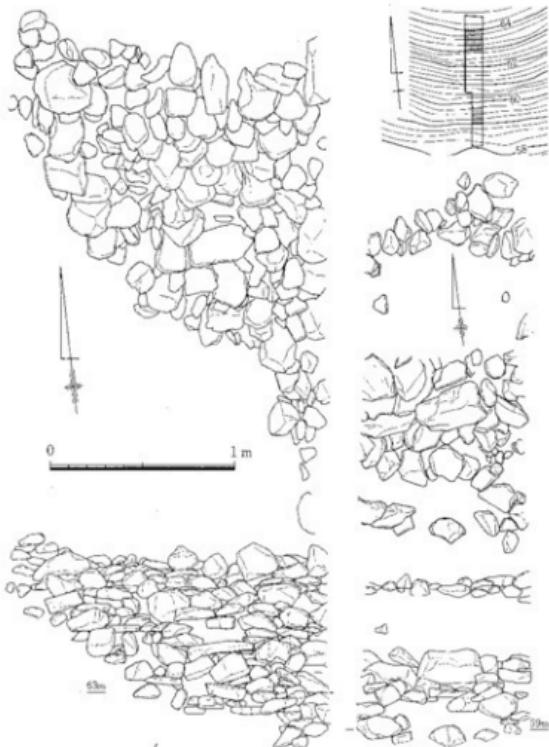


図-4 調査I区

テラスは75~100cmの幅で基底石の外をめぐる。標高は58.8m前後。南から北へと傾斜しており、北側に10cm低い。表面は5~10cm程度の石で覆われる。

埴輪棺はテラス外側に埋置されていた。軸はN-57°-Eである。墓塚は長さ220cm、幅80cmを測る。墓塚は茶白色花崗岩質粘質浮遊土（地山？）を穿ち、底はテラス面より約70cm低くほぼ水平をなす。墓塚壁面には埴輪棺南棺の東側と北棺の西側に20cm前後の石が棺の固定をはかる為か、立てかけられている。棺は横円形埴輪を用いた複棺式である。南棺（後述する埴輪3）の口縁部に北棺（埴輪2）の底部を差しこむものである。棺身小口には円筒埴輪片を閉塞に用いる。南側小口は3重に閉塞されており、そのうち2片は同一個体で体部に線刻を持つものである（埴輪9）。透しの閉塞にも埴輪片が用いられているが、破片としては比較的大なもので、棺身そのものを被覆しているような印象を受ける。閉塞に用いられている埴輪に完形品はない。

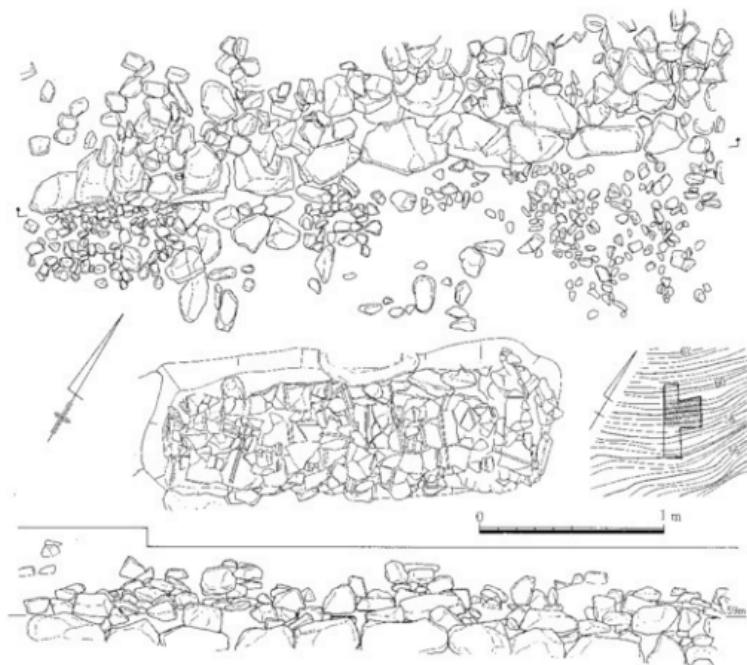


図-5 調査II区

・ III区

調査III区は墳丘頂部から墳丘主軸に対して直角に東方向に設定した 17×2 mの調査区である。標高は61~67.5m。この調査区では墳丘最上段の基底部、第二段テラスとそこに樹立され原位置を保つ円筒埴輪を検出した。

墳丘最上段の基底部は安山岩の板石を垂直に小口積みしたものである。現存高は40cm。現地表下10cmと非常に浅いところで検出した為、断面観察から垂直積みの本来の高さ、最上段斜面の角度等を導き出すことはできなかった。検出箇所を奥田氏墓碑を中心として折り返した位置に安山岩板石の散布がみられるところがある。標高は67m。

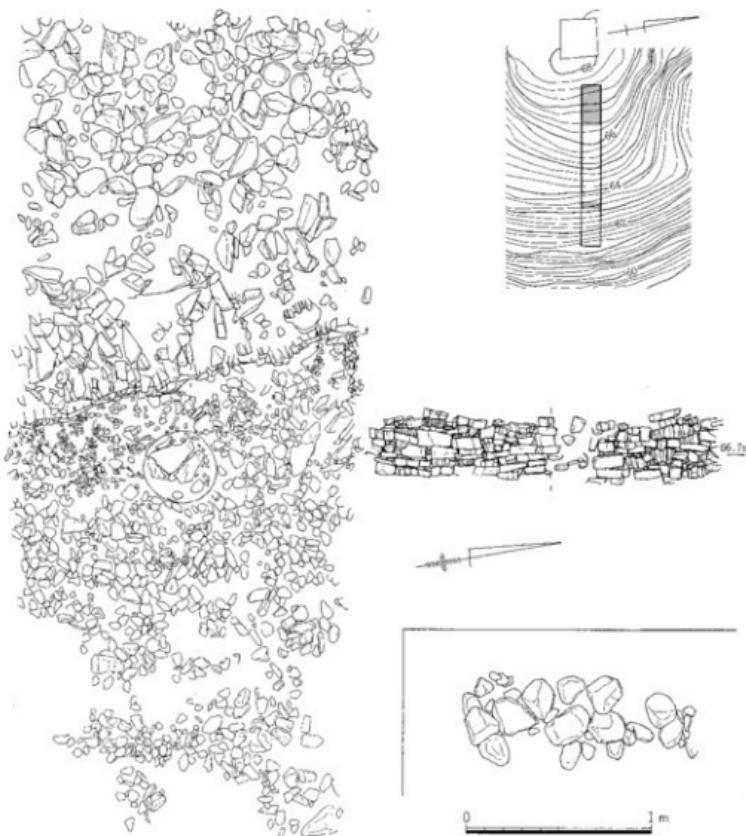


図-6 調査III区

第二段テラスは現存幅150cm。標高は66.6m。表面は3~10cmの石、白色礫で覆われる。白色礫については主体部等から混入したものも含まれる可能性もある。コンテナ3箱分出土した。テラスには円筒埴輪が樹立される。芯心で板石重直積みから40cm離れる。茶灰色土、白礫、安山岩板石で固定をはかる。両隣の埴輪とは芯心で110~120cmの間隔をおくものと思われる。第二段テラスと第二段斜面の変化点については、斜面の葺石が全く認められなかった為、位置等、不明である。

調査区東側から4m西の箇所で南北に走る石列を検出した。検出面の標高は62.7m。人頭大より二回りほど小さい石を用材とする。南壁断面観察によると、溝状に掘り込まれたところに葺石等が堆積したように見える。堆積土中には埴輪も混じる。

たちわりによって確認した墳丘の構造は、黄灰色土（地山？）が標高61.5~61.8mで平坦となり、その上に茶橙色土、茶褐色土、黒褐色土等を互層に積んでいく。

・IV区

調査IV区はくびれ部東側に設定した9×2.5mの調査区である。標高は56.25~59.25m。前方部テラス、埴輪列を検出した。

テラスは幅170cmを検出した。標高は58.5mではほぼ水平。表面は5~10cmの石で覆われる。埴輪は4基検出した。芯心距離は北から55cm以上、70cm、60cm、70cmである。南に向かうに従い並びは59mのセンターラインに沿うように外側にふれていく。

テラスより下方は早くから改変を受けていたようであり、墳丘の状況はつかめなかった。断面にみえる黒褐色粘質土、茶色土には奈良時代の土器が含まれ、葺石に使用されたとは思われない40~50cmの花崗岩が10数個、積まれたように堆積していた。

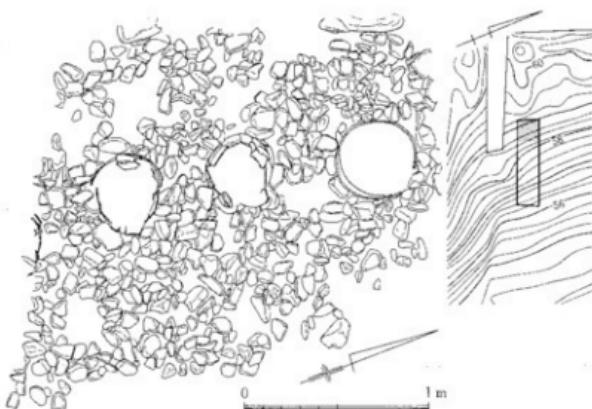


図-9 調査IV区

第4章 遺物

図示した埴輪は、円筒埴輪7点、橢円形埴輪2点である。1は調査III区で垂直の石積の外側に樹立されていたもの、2～9は調査II区で検出した埴輪棺を構成していたものである。

1は現存高36cm、底部径42cmを測る。突帯はその端部を明瞭、シャープにする。端面は凹む。透かしは方形で四方にあく。調整は外面は10本/cmのナナメハケ。内面も同様のハケとナデ。ハケ原体は幅約3.5m。色調は淡茶黄色を呈し、黒斑を有する。胎土は3mm以下の長石、くさり礫などを含む。

2は埴輪棺の北棺に使用されていた。器高95cm、長径48cm、短径36cmを測る。口縁端部は外側に大きく屈曲する。突帯は上面、端面、下面が調整により顯著な凹みを呈する。体部の上から2段目、4段目に表裏各2個ずつ、逆三角形の透しがあく。調整は外面体部の上から1段目はナナメハケ後、ハケの確認ができないほど丁寧なヨコナデ。2～4段目はタテハケ後、ヨコナデ。基底部はタテハケのみ。内面はタテ～ナナメハケ後ナデ。色調は明赤橙色を呈し、黒斑を有する。基底部を除く各段外面に朱を施す。

3は埴輪棺の南棺に使用されていた。器高88cm、長径58cm、短径40cmを測る。口縁端部は外側に屈曲する。突帯は上面、端面が顯著に凹む。体部の上から1～3段目に三角形の透しがあく。1段目には表面に3個、裏面に1個である。2、3段目には表裏各2個ずつである。調整は体部外面は基本的にタテハケ、内面は口縁部はヨコナデ、体部はヨコ方向のケズリを主とする。色調は明赤橙色を呈し、黒斑を有する。基底部を除く各段に朱を施す。

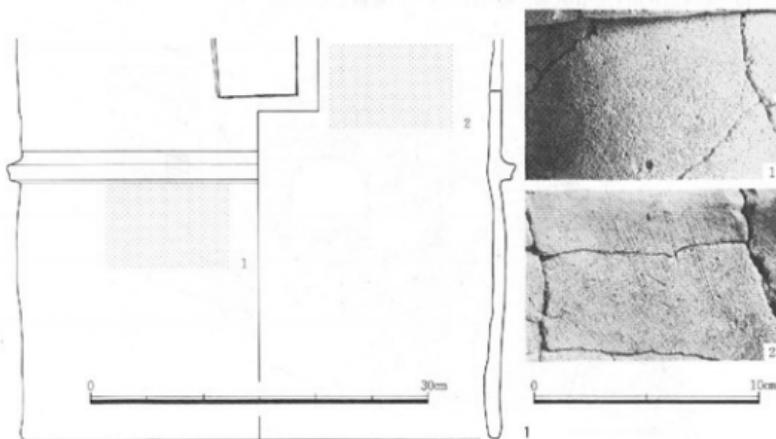


図-8 墓輪実測図(1)

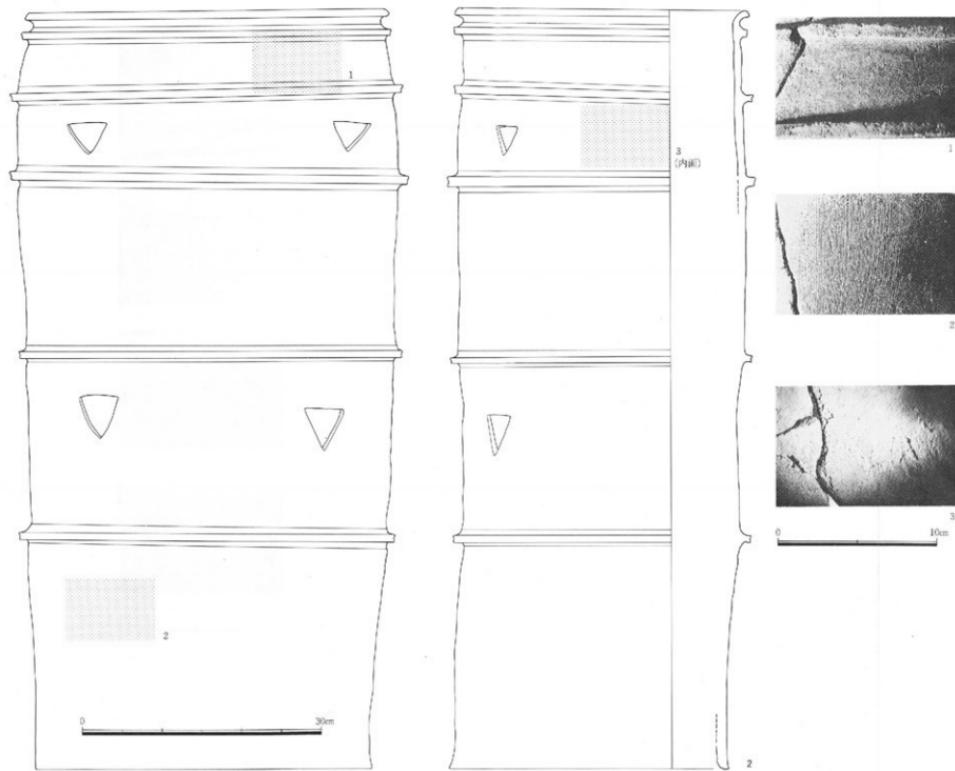


図-9 塗輪実測図(2)

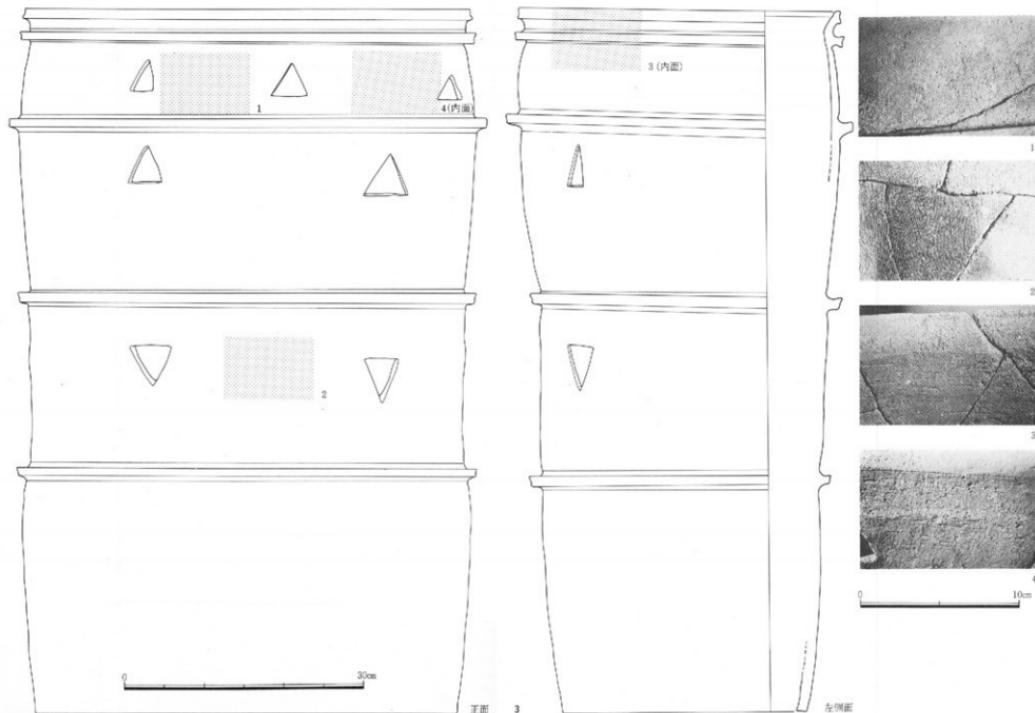


図-10 塗輪実測図（3）

4は現存高56cm、口径69cmを測る。口縁部は大きく外反し、端部は丸い。3条の突帯は何れも上面、端面、下面が顕著に凹む。体部の上から1、2段目に長方形の透しがあく。1段目は90°ずつ4ヶ所に、2段目は90°に2ヶ所のみである。調整は外面はタテハケ、内面は口縁部と体部との接合部がヨコハケ、以下はナナメハケを主とする。口縁部は両面ともヨコナデ。色調は淡橙黄色。胎土はやや粗く、1~3mmの砂粒を含む。

5は体部1段目に三角形の透しが4ヶ所にあく。外面はタテハケ後、内面はナナメハケ後それぞれナデる。色調は淡橙色~淡褐色を呈する。胎土はやや粗い。施朱がみとめられる。接合

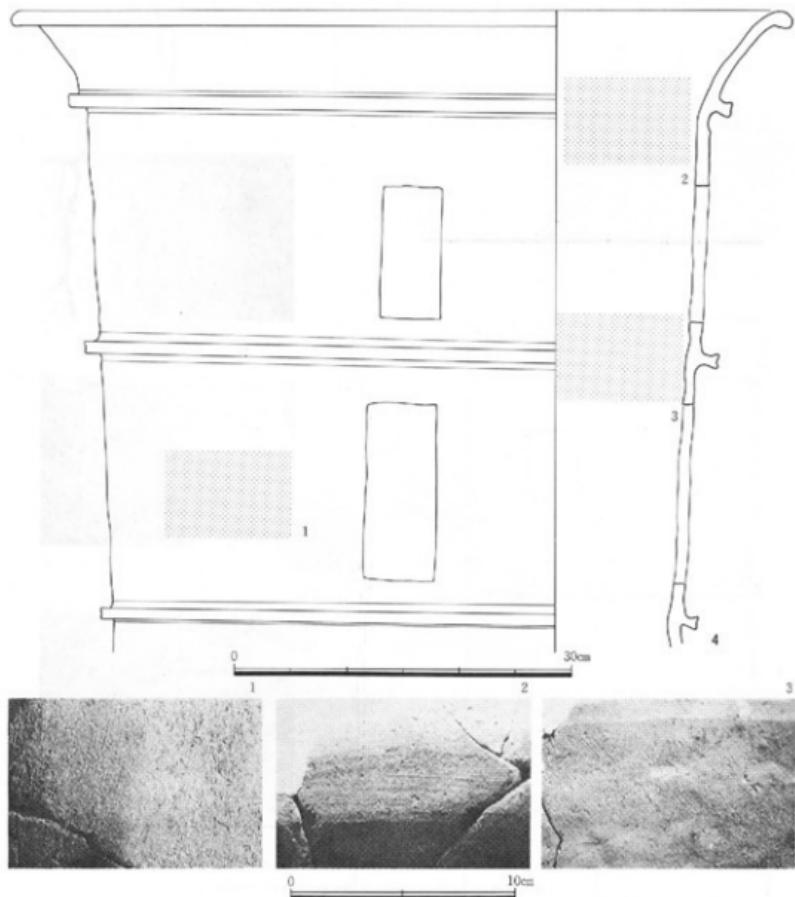


図-11 増輪実測図（4）

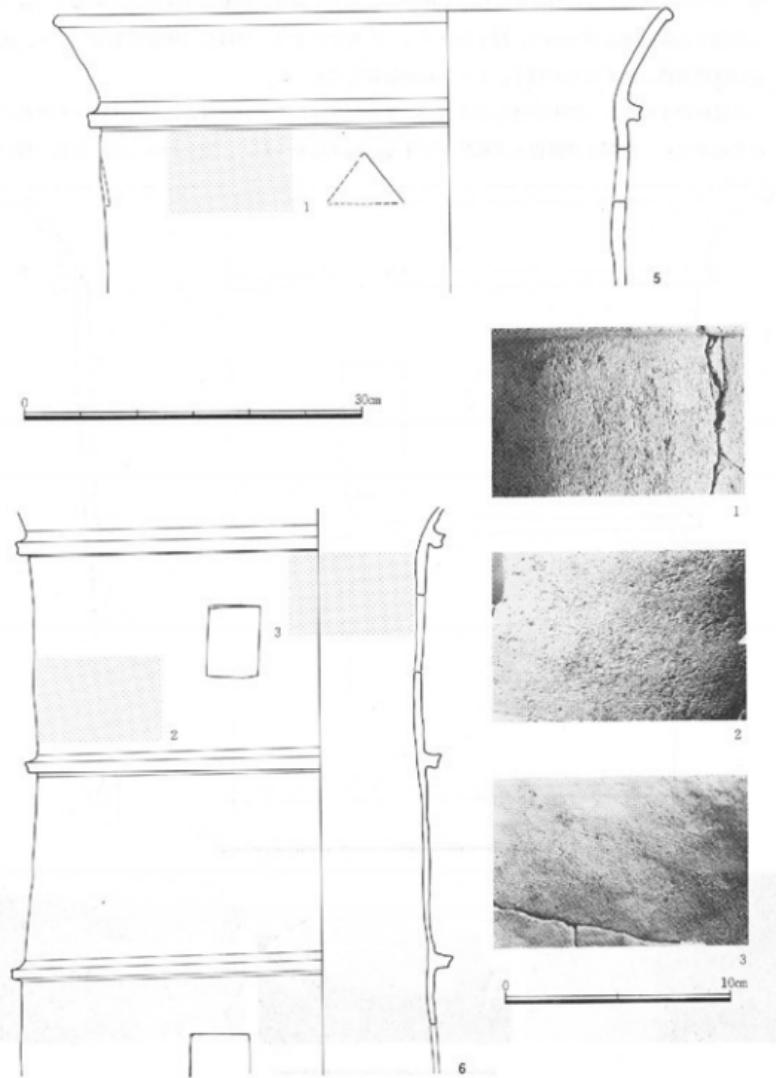


図-12 塗輪実測図 (5)

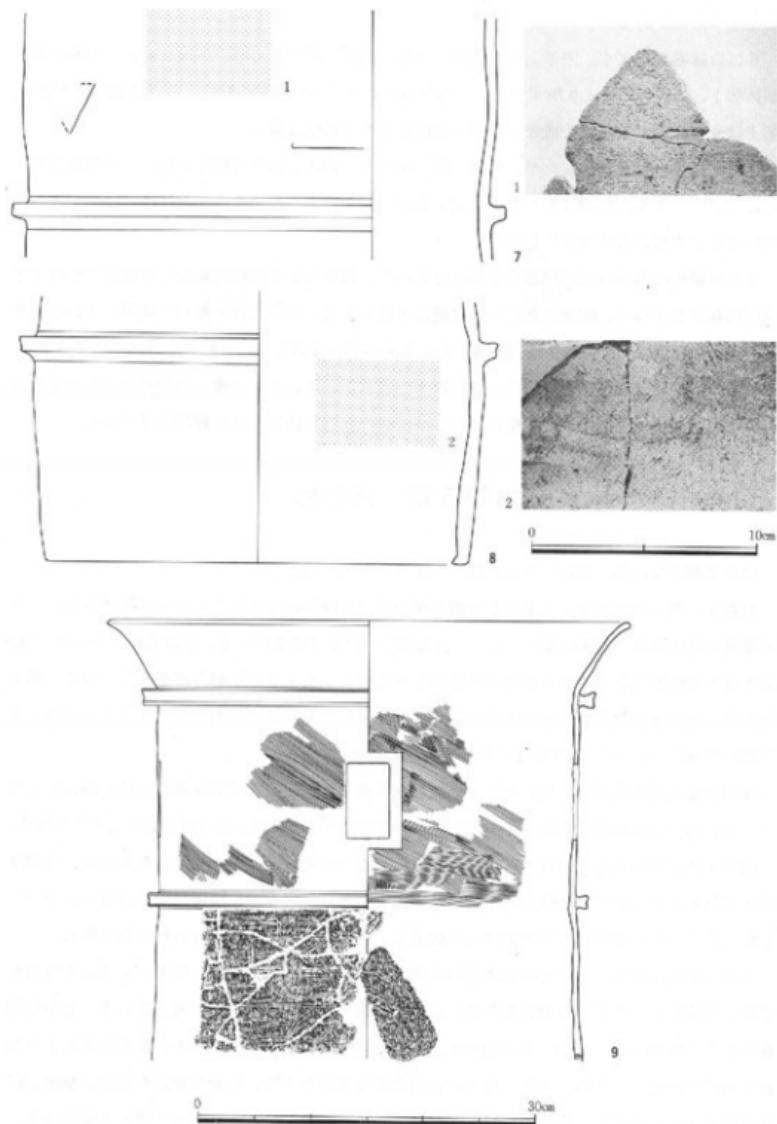


図-13 塗輪実測図 (6)

はできなかったが、色調、胎土が類似した同一個体と思われる破片に、突帯接着部に方形刺突痕をもつものがある。

6は口縁端部を欠く。突帯上面、端面、下面が顕著に凹み、上端、下端は鋭い。方形の透しが体部1、3段目に各4ヶ所ずつあく。内外面ともヨコハケを主とする。色調は黄灰色を呈し、胎土はやや粗い。埴輪棺を構成する他の埴輪に比べて器壁は薄い。

7、8は接合できなかったが、色調、胎土から同一個体である可能性が高い。内外面とも丁寧にヨコナデする。色調は明赤茶色を呈するが、施朱によりやや赤みをおびる。一部の透しについては、方形になる可能性がある。

9は埴輪棺の南小口部の閉塞に使用されていた。個体としては口縁部から2段目にかけて半分が残存するのみで、閉塞にあたっては縦に半裁した後、その2枚を重ねて使用していた。突帯の三面は顕著に凹む。調整は内外面ともナナメハケを基調とし、口縁部についてはヨコナデ。1段目にまき形の透しが4ヶ所あく。5mm以下の長石、石英、くさり礫、角閃石などを多量に含む。色調は淡橙褐色を呈し、器壁は薄い。2段目に直線で構成される線刻文様がある。

第5章　まとめ

全面発掘でない為、制約はあるが以下のような成果を得た。

調査I～III区の状況から玉手山1号墳の後円部は3段築成であることがほぼ確認された。その規模は直径58m、高さ約10mになる。前方部については明確にすることはできなかった。但、調査IV区で検出したテラスを前方部基底部とみた場合、あまりにも前方部が細く、短く、低くなる為、地形等を勘案してその下方にもう1段想定した方が妥当であろう。そうした場合、1号墳の全長については110m前後になるかと思われる。

後円部最上段基底部で検出した安山岩板石垂直積みは松岳山古墳埴丘巣のそれと類似しており、玉手山、松岳山両古墳群の実体を把握する上で欠かせぬ資料となり得るものと考えられる。

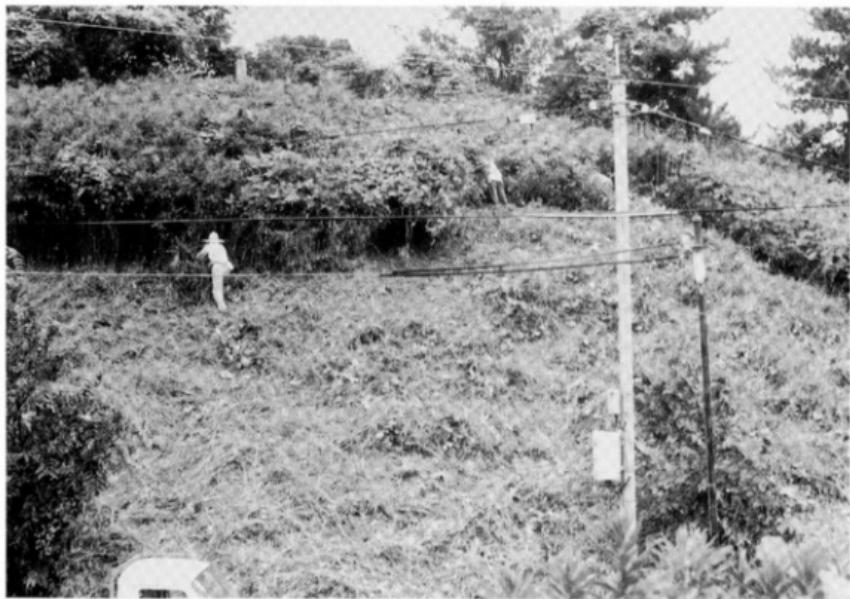
内部主体についても、堅穴式石室であるとの報告（前掲『節・香・仙』）があるが、今回は内部に散布されていた可能性がある白色礫の出上があったのみで、明確な資料は得ていない。しかし前述の板石垂直積みの検出はその構造上、存在を裏付ける有力な資料となり得る。

今回の調査は整備へむけての基礎資料作成を目的としたものである。将来、玉手山1号墳を整備、公園化し、市民の歴史教育あるいは憩いの場として役立てようと考えている。しかし現在のところ整備方法（施設、導線計画）、保護保存方法等具体的な面ですぐ着手できるような青写真は描かれていない。今後、地元の意向を取り入れた上で、充分な検討を加え、整備、保存をはかっていきたい。今年度は整備へむけての第一歩として、3月中旬に埴丘と周辺住宅、道路との境界に桜、椿、カイヅカイブキ等を植樹し、景観の維持、保全につとめた。

図 版



玉手山3号墳からの景観（左の墓地は2号墳）



草刈り風景



後円部（2号墳から）



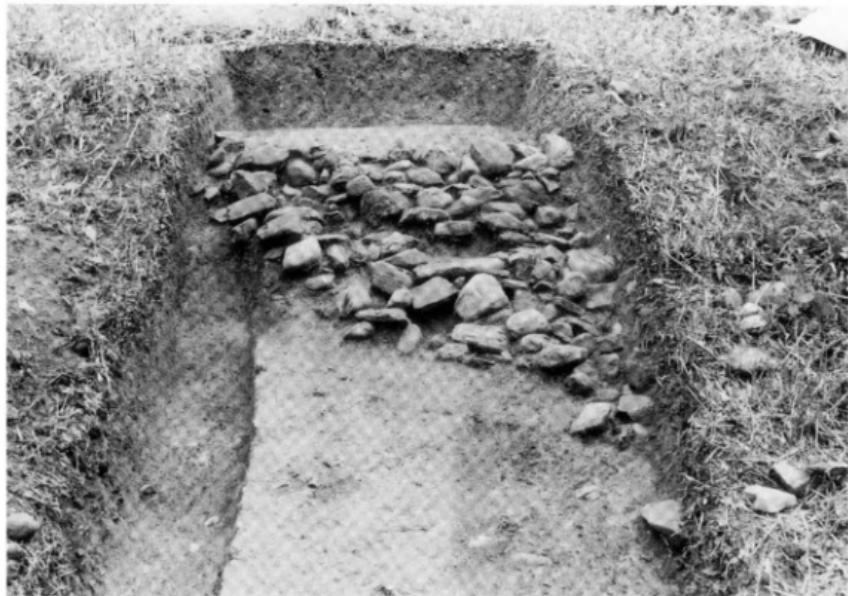
同（南西から）



前方部（後円部から）



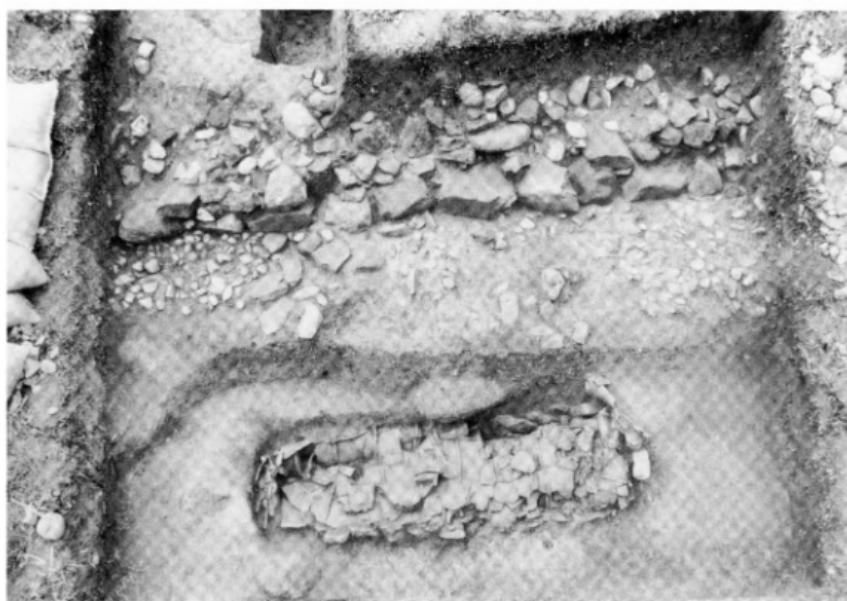
後円部（前方部から）



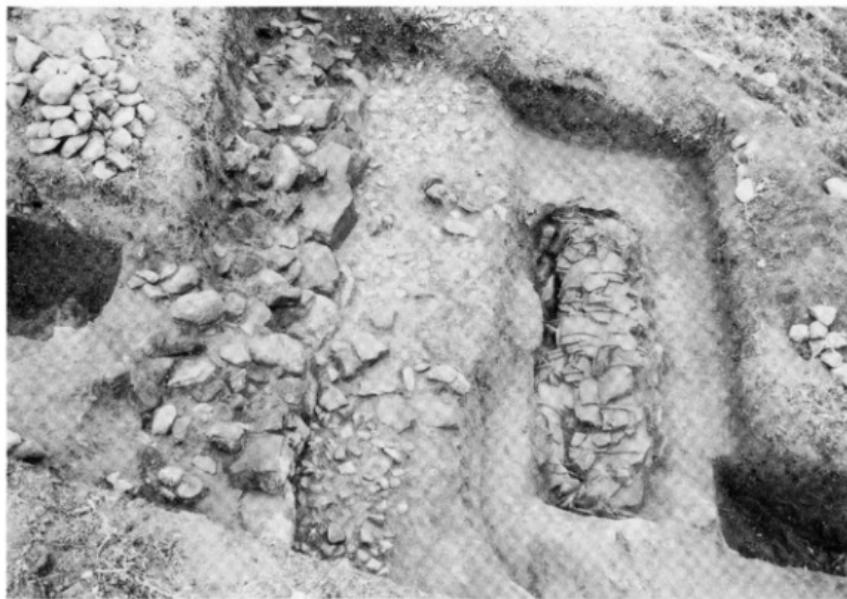
調査T区（南から）



同（東から）



調査II区（東から）



同（南から）



調査II区（南から）



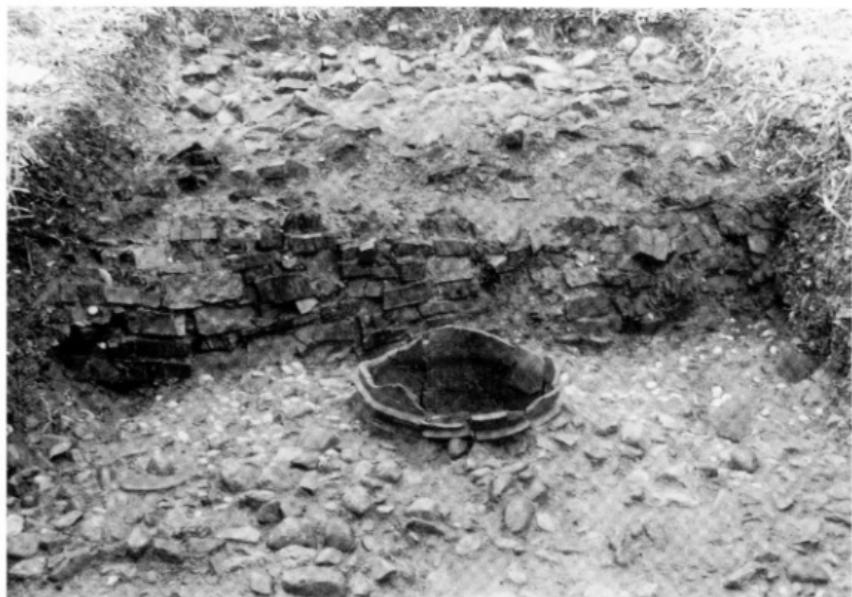
作業風景



調査II区 墓輪棺上半除去後



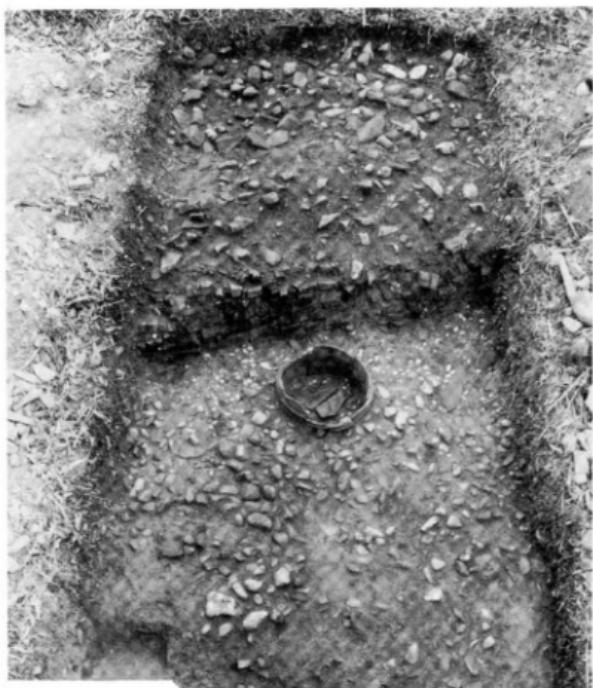
同 墓輪棺除去後



調査Ⅲ区 垂直の石積（東から）



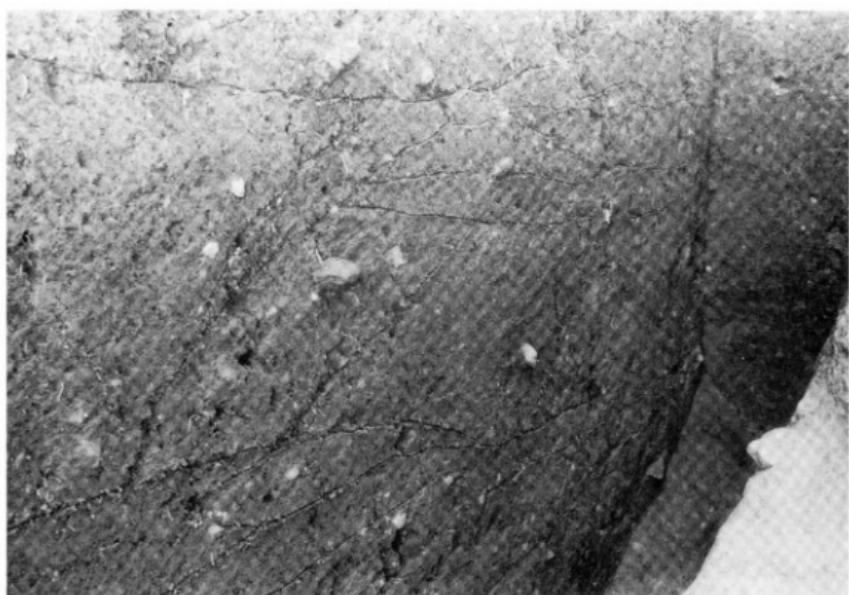
同（南から）



調査Ⅲ区（東から）



同 保護状況



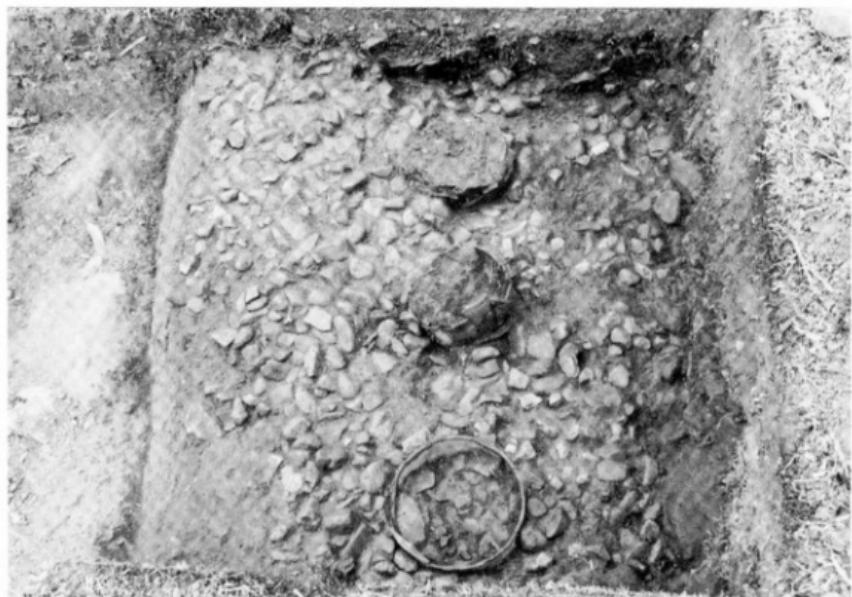
調査Ⅲ区 南壁土層



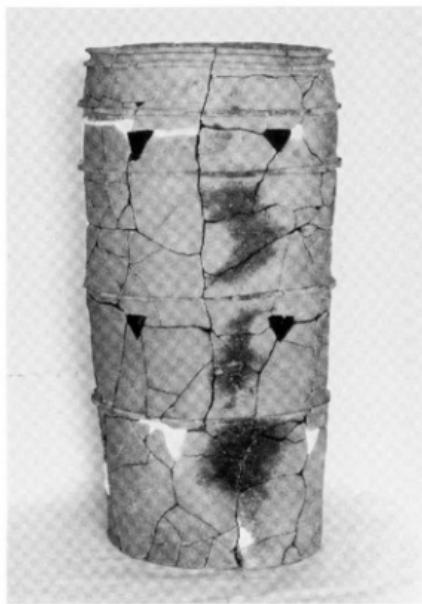
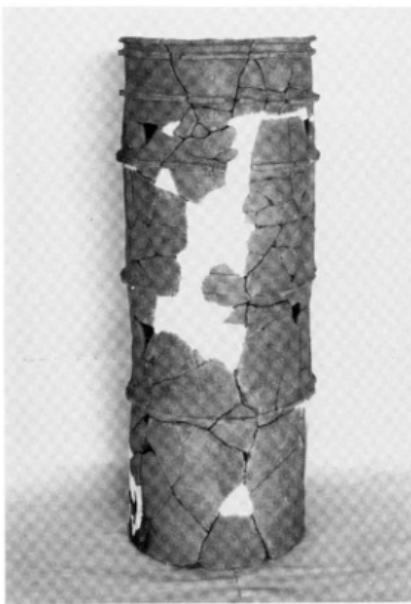
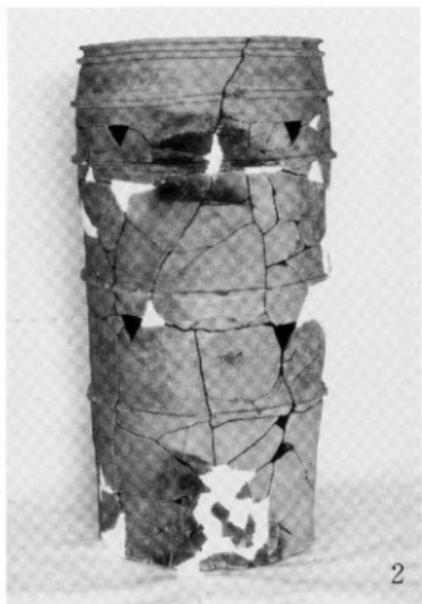
同 石列



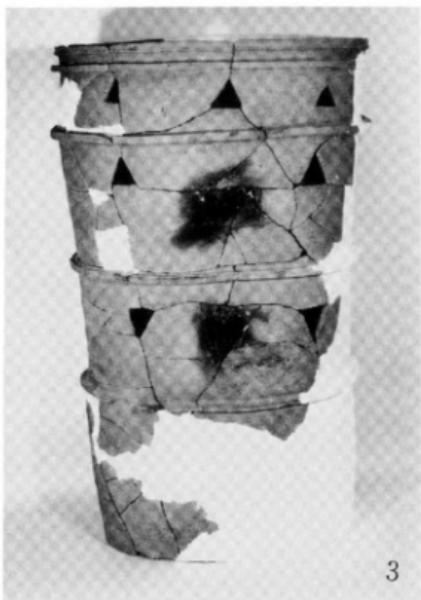
調査IV区（東から）



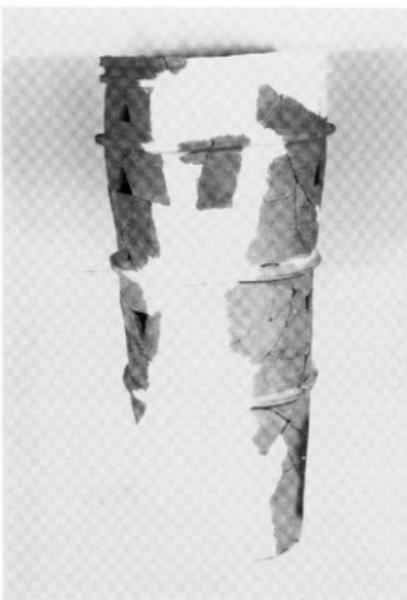
同（北から）



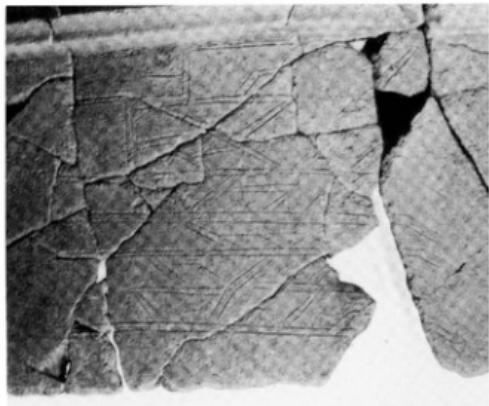
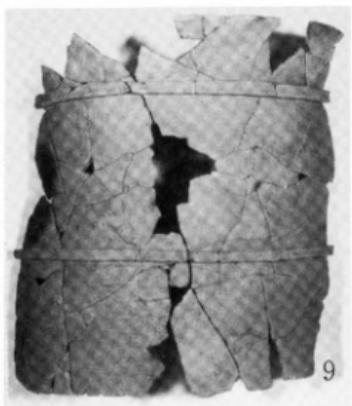
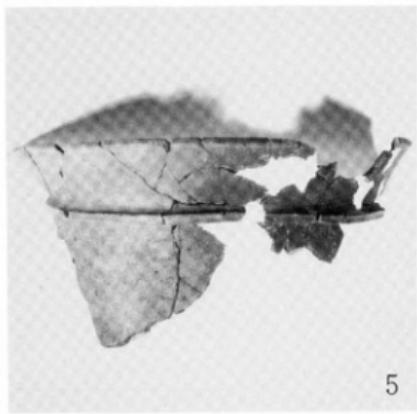
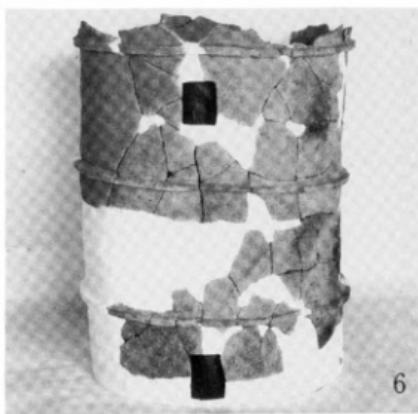
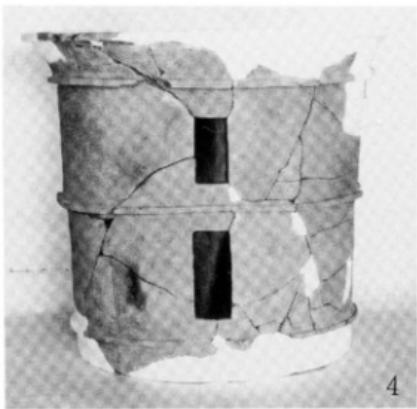
出土埴輪



3



出土埴輪



玉手山1号古墳範囲確認調査概報

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内716

発行年月日 昭和62年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

